
魔王に掛けられた死の呪いは末代まで続く

ガルヴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王に掛けられた死の呪いは末代まで続く

【Nコード】

N2593T

【作者名】

ガルヴ

【あらすじ】

魔王の子とされた少年は知らなかった。いや、信じてなかったまさか自分があゝの魔王の中の魔王……大魔神王の力を濃く受け継いでるなんて

ある少年も同じく知らなかった

自分が魔王を倒した者の生まれ変わりだなんて

世界は繰り返す。まさか互いが親友だと兄（弟）だと慕っていた人が魔王（勇者）だったなんて！これはそんな二人の想いが交錯する

第0話世界はここから始まった（修正版）（前書き）

大魔王王・ルートファルド

世界の災厄の元となった人物。幼少時より成人のアースガルナ人の力を上回っていたという

この人物が死の間際、永遠の死の呪いが掛けられたことによりアースガルナ人は必ずと言っていいほどに同じ末路を辿ることになると後に世に出される伝記の最後を締め括る形で記されている

天空神王

天界の王にして魔界のありとあらゆるものが大嫌いと言いつつ、常日頃から思っていたが。表では好意的に接していた

女神龍

中立的な立場で龍族や獣族達の上に立つ存在だが基本的に誰にでも平等に接していた

大悪魔長・シャルキイ

全ての悪魔の上に立ち

悪魔の管理を一任されていた。自称・大魔王王の右腕

第0話世界はここから始まった（修正版）

この世界の支配力の強い勢力は簡単に分けて三つあった

一つは天界の王率いる天空神王軍

一つは魔界の王が率いる大魔神王軍^{だいましんおうぐん}

そしてもう一つは中立的立場の女神龍軍である

それぞれ自分達の領域を守り暮らしていた。

時に好意的に時に敵意を隠して。

しかしある時を境にその敵意がついに臨界点を突破することとなる
始めに行動を起こしたのは魔王軍である

「許せねえ…許せねえぞこいつは……」

大魔神王・ルートファルドはひどく怒り、そして悩んでいた

「そつでございますね。……ルートファルド様」

「何だ……シャルキイ」その悩みとはどう敵を有効的に攻めるか否か

「ここは奴らに私達の恐ろしさを再認識させるのが一番かと」

「はははははっ……確かにそつだ！ それっきゃねえよなやつぱ」

シャルキイと呼ばれた男の言葉によって、ルートファルドの悩みは
消えた

「では早速」

「……いらぬ。ここは俺一人でだ」

「ですがそれでは」

「心配するな……策はある。だが準備だけはしておけ」

「必ず貴様らの力も必要となるであろう」

「ははっ！ では私はこれにて」

「うむ……」

シャルキイは頭を下げると出ていった

「さてしばらく休むとするか」

ルートファルドは椅子に腰掛けたまま目を閉じて眠りについた

「そろそろ……だな」ルートファルドは目を覚ます。視線だけを窓の外へ移す

すると目に入ってきたのは深い深い暗闇である

「今こそ最大の好機と言ったところか」

ルートファルドが立ち上がるとその姿が消えた いや消したのだ
った

この大魔神王が引き起こした出来事は永きに渡り語り継がれること
となる

神王は朝と昼を作った。夕方は光と闇の間の時間でどちらも干渉し
合う

逆に言えば干渉しなければこの世界では夕方という時間帯は成立し
ない

朝や昼が光の時間ならば夜は闇の時間帯

光が支配する時間は朝昼とあるが大魔神王が支配出来る時間は暗闇
に閉ざされた夜しかない

それを快く思わなかった大魔神王は天空神王と戦い

最終的に力を封じ、朝を閉ざした

それが朝夕夜問わず永遠の夜の始まりである

「世界の創造者は一人で充分なのだ。…二人もいらぬ」

「何を言っているのですか。私とあなたが時間を制御し調整するこ
とによって、この世界の調和は守られているのですよ？」

大魔神王の姿は天界の天空神王の城の自室にあった

「制御？調整？世界調和の制約？はっ！ くだらん……まったく
言っていないほどにくだらん神王よ」

「……………」

「今一度言おう……一つの世界に創造神も創造者も一人で充分なのだよ」

「消えてもらうぞ……神王・デイスペル・ド・マギナ」大魔神王は妖気とも魔力とも取れない邪悪なオーラを開放した。

時間は深夜の時間帯であつたが更に色濃く闇に包まれているような気にさせられる

「……仕方ありませんね」

そして神王も負けじと神力を開放し戦闘の構えを取り、対峙したが二人の神には圧倒的な力の差があつた。

それは単純な実力ではない。むしろ実力ならば互いに勝るとも劣らない力を持っていた

その圧倒的な差とは時間帯にあつた。朝か昼なら神王が有利だつただろう

夕方ならばどちらが有利とも言えないだろう

夜ならばまだどちらが勝つかわからなかつただろう

だが不幸な事に時間は深夜の時間帯だつた。この時間帯ばかりは神王は干渉出来ず力は弱まる

逆に大魔神王は深夜という時間帯もあつて何の制約もなく力を振るう事が出来る

それどころか魔の力は増幅された

「くっ……まさかこれほどまでの力とは」

「ふははははっ！！これより我がこの世界唯一の神なり！あつ

ーはっはっ……ああははははははっ！！！！」

こうして神王は真つ黒な球状をした玉に封印され、世界は暗闇に閉ざされる事になった。だがそれも永遠に続きはしなかったという

「なっ……バカなっ！！　こんなことがあつていいはずがあッ!?」
昔々の話ではあるが世界が夜だけの時代があつたらしい

「大魔神王っ！　ここがお前の墓場だ！」だがそれも長くは続かなかつたらしく、剣神と呼ばれた剣の腕前が当時、世界の五本指に入る鍛冶師と暗闇を消し去るほどの力を持った光の騎士により倒されたとか

「ははははっ！　それぐらいで我が力が永遠に滅びるとでも？　必ず蘇り、主らを地獄の業火で焼き払ってくれる！」

「黙れ！　大魔神王……もしお前ら一族が生き続けたとしても永遠の死の呪いに苦しみ続けだろう!!」

大魔神王が死ぬ間に呪いを掛けられたらしい。
呪いとか正直信じられないが

「ルミナス様？　何をなさっているのですか？」俺は自室でそんな信じられない世界の創成期時代に実際にあつたらしい魔王を倒した二人の勇者とその仲間達が活躍したとかいう胡散臭い伝記を読んでいたら扉が開かれる。顔を見せたのは俺の世話係を任せられているメイドさんでダークエルフだ。背は俺よりいくらか高いまあ年上だから当たり前か

「ルミナス様？」

「ああ……悪い。ちよつとばかり読書タイムだ」

ちよつとばかり物思いに耽つていた俺は伝記の本を閉じ、メイドの方を向いた

「……そうですか。もうすぐ昼食の用意が出来ますので暫しお待ちくださいませ」

「ああ分かった。わざわざありがとなエリス」

「いえいえ……では」笑顔を向けるとダークエルフでありメイドのエリスはボタンツと扉を閉めた

「尖った耳……いいよなあ」

などと呟いた時だった

「ルミナス様、昼食の前に剣技の習練ですぞ」

「うわっ……トライ、いきなりか」

エリスが居なくなっただと思っただ剣技・魔法術訓練担当のトライデントがやってきた。こいつは昔、父上と共に戦った戦友だとか。アイスガルナ七英雄の一人だ

昔はかなり暴れてたらしく鬼神と呼ばれて恐れられてたらしいまあ俺が生まれる前のことだから詳しくは知らないが

「何を言っておられるか！　すぐにでも始めますぞ！」

「いいてててっ！！　引っ張んなって」俺はトライに引っ張られる形で中庭に向かった。……半強制的ではあったが

第01話無能王子は何を思うか（前書き）

以下は登場人物などの説明

【アースガルナ人とその国】

実力主義国家で力がない者は切り捨てる。裏切り者も許さず裏切りに失敗でもすれば内容は関係なく即死罪として処理される。アースガルナ人は極悪非道で血も涙もないというフレーズが世界に知れ渡っている。事実、戦いが好きで血を見ると興奮して気がおかしくなるとか

【ルミナス・アースガルナ】

アースガルナ編の主人公。伝説の魔王の中の魔王である大魔神王の生まれ変わりとの噂があったがその噂も今では忘れられている。アースガルナ国の第二王子で覚えが悪く不器用なため【無能】と評される。

9

【ルミナスの兄】

事故死とされているが本当のところは生死は確認されておらず行方不明扱い

【ダークエルフのメイド姉妹・エリス・エルレ】

エリスが姉で妹がエルレである。
訳あって若くしてメイドをしている

【トライデント・ヴァーナス】

事実上ルミナスの剣技と魔法の師匠的立場にある。
昔は数々の戦で暴れまわってたらしく鬼神と評される。
死後、アースガルナ人がベースとするトライデント流剣術や拳闘術

などの流派の元になる偉い人
家の近くにある道場の師範をやっていたりする

【リモール・アルスター】

閃光の聖騎士と呼ばれる魔法騎士で自らの部隊を引き連れ様々な国々の戦争に介入している。妻と子供がいるが家には一切帰っていない様子

第01話無能王子は何を思うか

「なっ……バカなっ！！　こんなことがあつていいはずがぁッ!?」
昔々の話ではあるが世界が夜だけの時代があつたらしい

「大魔神王っ！　ここがお前の墓場だ！」

だがそれも長くは続かなかつたらしく、剣神と呼ばれた剣の腕前が
当時、世界の五本指に入る鍛冶師と暗闇を消し去るほどの力を持つ
た光の騎士により倒されたとか

「ははははっ！　それぐらいで我が力が永遠に滅びるとでも？　必
ず蘇り、主らを地獄の業火で焼き払ってくれる！」

「黙れ！　大魔神王……もしお前ら一族が生き続けたとしても永遠
の死の呪いに苦しみ続けだろう！！」

大魔神王が死ぬ間際に呪いを掛けられたらしい。

呪いとか正直信じられないが

「ルミナス様？　何をなさっているのですか？」

俺は自室でそんな信じられない世界の創世期時代に実際にあつたら
しい魔王を倒した二人の勇者とその仲間達が活躍したとかいう胡散
臭い伝記を読んでいたら扉が開かれる。顔を見せたのは俺の世話係
を任せられているダークエルフのメイドさんだ。背は俺よりいくら
か高いぐらいか

まあ年上だから当たり前か

「ルミナス様？」

「ああ……悪い。ちょっとばかり読書タイムだ」

物思いに耽っていた俺は伝記の本を閉じ、メイドの方を向いた

「……そうですか。もうすぐ昼食の用意が出来上がりますので暫し
お待ちくださいませ」

「ああ分かった。わざわざありがとなエリス」

「いえいえ……では」笑顔を向けるとダークエルフでありメイドの
エリスはボタンツと扉を閉めた

「尖った耳……いいよなあ」

などと呟いた時だった

「ルミナス様、昼食の前に剣技の習練ですぞ」

「うわっ……トライ、いきなりか」

エリスが居なくなっただけだと思っただけなら今度は剣技・魔法術訓練担当のトライデントがやってきた。こいつは昔、父上と共に戦った戦友だとか。

昔はかなり暴れてたらしく鬼神と呼ばれて恐れられてたらしい
まあ俺が生まれる前のことだから詳しくは知らないが

「何を言っておられるか！　すぐにでも始めますぞ！」

「いいてててっ！！　引っ張んって」俺はトライに耳を引っ張られる形で中庭に向かった。……半強制的ではあったが「しっかりと真面目にやるのですぞ？　ルミナス様」

トライは念を押すと小さめの訓練用の剣を差し出してきた

「もちろんそんなこと分かってるよ」

俺はトライから訓練用の剣を受け取ると少し距離を取って軽く何回か振ってそれを構える

「ならよいですが」

トライも同じように構えてみせた。持っているのは長めの杖だったが

「い……いくぞ」

「何処からでも」

トライは大人の余裕か涼しい顔

「でりゃあああっ！！」

「甘いすぞ」

俺はトライに向けて大振りでも何度も剣を振った。だが全て避けられ、終いには杖で腹を突かれ

「うぐっ！？」

まともに受けて尻餅をついてしまった

「正に三流のやることですな……」

そんな情けない姿を見て杖を持った老人・トライは笑った
「っ……………」

俺は恥ずかしさを胸に感じながら立ち上がった

「よろしい。かかつてきなさい」

そんな俺の立ち上がる姿を見てトライは何かを感じたのか促してきた
「はあっ！」

俺は負けじと剣を振るいに振るったが、その剣撃も全てかわされる
それが繰り返される

「……………今日は、このへんで良いでしょう」

トライは杖を下げた。剣技訓練終了の合図も同然だった

「俺はまだやれるぜ……？」息絶え絶えにそうトライに言った。何故
か焦りを含ませながら

「いえ、もう昼時ですから……昼食も用意されていることでしょう」
「う」

「ああ……………そう、だな」

場所は変わって特別食堂。王族のみが食事を許される場所だ

「あっ！ルミナス様、お待ちしてましたよ」

長さは背中にまで伸びた赤髪にメイド服姿、身長は俺よりかは低い
程度か

「あっエルレか。もう腹ペコだぜ……………」

「ふふっ……………ですよね。ささっ！御着席くださいな。次にお持ち
致しますので」

ダークエルフでありエリスの妹でありメイドのエルレは椅子を引き
俺を座らせると特別食堂から出ていき姿を消す

「全く最近のメイドはなってますenna……………」トライは俺の隣の椅子

に腰掛け

【最近のメイド】について愚痴をぶつぶつと何やら呟き出したので
適当に相槌だけ打っておくことにする

「忙しい忙しいなー」

エルレは食事をオボンに乗せて運んでいた。その時である

「全く無能な王子には困ったものですな」

「同感ですよ。第一王子ルギアーク様は有能でしたのに事故死して
しまうとは……世の中手くいかないものです」

客室から何やら声が聞こえたのは。その声は第二王子・ルミナスを
無能だ兄は有能だったと比べられるものだった

「……………」

エルレは聞こえないフリをして特別食堂へ急いだ

「どうでしたかあ？」エルレや他のメイドや執事が運びテーブルに
並べた食事を四十分程度かけて食べ終えた

「ああ美味しかった」

「…まあまあじゃな」

「それはよかったです！」

エルレは何故かトライの反応を無視してニコニコ笑顔で言った

「さてと……ちょっと風にあたってくるな？」

ルミナスは立ち上がると足早に扉に向かう

「ルミナス様！」

「分かってるって！ 少し風にあたってくるだけだから！」

トライがルミナスに向けて叫ぶがルミナスは分かっていると行って特
別食堂を出ていった

「まったくルミナス様にも困ったものですな……」

「あははは……」トライがまた愚痴を呟き始めるとメイドのエルレは苦笑いを浮かべていた

「まったく……あんなどこにいつまでも居られるわけないぜ」

ルミナスは裏庭の木の上に登っていた。

裏庭はいつしかルミナスの心の安らぐ場所になっていた。何故ならここにはあまり人が来ないからである

アースガルナ城内に嫌でも見え隠れする権力争いなども見ないで済む。そして自分に大する批判的な声も耳に入らなくて済むからだった

「俺は無能なんかじゃない……俺だって頑張れば兄上を越えることだって出来るんだ」

ルミナスは今も昔も悩みは変わらなかった。いつも兄と比べられ生まれのせいか無駄に魔法力は高かったが実力がそれに伴わず苦悩し、いつしか兄との差がトラウマにコンプレックスになっていた

「絶対負けるか……無能じゃないってところをいつか絶対あいつらに見せてやる」

ルミナスはそう裏庭の木の上で自分自身の胸に刻む想いで一人誓った。

涙は流さない。泣いたら一生無能と笑われ続ける気がしたからだった

どれぐらい時間はたったか

いつのまにやらルミナスは眠っていた

「やはりここでしたか。ルミナス様、起きてくだされ！」

そんなルミナスを発見したトライデントは浮遊魔法で体を浮かせルミナスが眠っている木の上に降り立ち、ルミナスの体を揺さぶった

「……？」

「ルミナス様、魔法術の訓練の時間ですぞ」揺さぶったおかげで一

応起きたルミナスに向けて静かに言い放った
するとトライデントの一言で

「え？ ああ……分かった！」

ルミナスは一気に眠気が吹っ飛んだかのように表情が変わる。その顔を見てトライデントは驚いた

何故なら何か決意を秘めているような今まで見たことがない表情をしていたからだった

「では今回の訓練内容を説明しますぞ」

場所は変わって再び中庭に来ていた。ルミナスにとって中庭は訓練を受ける場所と化していた

「今回の訓練は魔力制御の訓練です」

「手本見せますゆえ、まずは見ていてくだされ」

トライデントは杖を構え

「はっ！」軽く力を入れた。すると中庭に散らばるただの小石が浮かび上がった

「！？」

ルミナスはそれを見て驚いた

「まだこんなものではありませんねぞ……ふんっ！」

トライデントが更に力を入れたと思ったら小石がルミナスに向かってきた

「うつ……！？」

それを見たルミナスは目を瞑ってしまいが既に小石が通り過ぎた後だった

「とまあこんな感じですね……何でもよいので物を自由に動かせたら初期段階の魔法制御は可能だと思いますな」

「そっ……そうか」

ルミナスは目を開け密かに安堵した

「ではやってみてくだされ」

「ああ分かった……」ルミナスは辺りを見回してみた
まずは手頃な小石を標的に訓練用の杖を構えてトライデントがやって
いた様子を真似て力を入れる

「ふぬぬぬっ……」

だが小石が動きを見せる様子はない
二十分経過

「はああっ！ ふいやあああっ！！」

小石に変化なし。四十分経過

「はいやあああっ！！ まだまだああ！」小石に変化はなし。二時
間経

「もう無理ですな……」

「えっ……？」

トライデントは溜め息一つつき、立ち去ろうとした

「ち、違っただよ……俺だってこれぐらい出来るんだよッ！！」ル
ミナスは絶望した見捨てられたと思い、杖を思いきり天に向かって
振り上げた。すると小石は先程までとは嘘のようにびゅんびゅんと
空中を上下左右に踊るように舞った

「むっ……これは」

トライデントは振り返りルミナスに何か言おうとしたが小石が舞っ
ているのを見て啞然とした

「え……？」

トライデントがこちらを向いた事により何を言われるのかと思い目
を瞑った。同時に杖を下げると小石は静かに地面に落ちた

「ルミナス様……あなた」

その時だった。いきなりどこからか拍手する音が聞こえた

「む？ 誰じゃそこにいるのは？」

トライデントは握手が聞こえた方を杖で差し向け言い放った

「いやいや凄いなルミナス君は」すると木の陰から金髪で鎧姿の青
年が姿を見せた

「ん……誰だ？」

ルミナスは目を開け言った

「お主は……リモールではないか。何故貴様がここに」

リモール。それは現アースガルナ国王であるルミナスの父やトライデントと共に戦った戦友の名前であった

「ああ、昨日帰ってきたんだよ。いやしかし北の方は本当寒くて参っちゃったよ……やはり住むなら住み慣れた故郷が一番だね」

「は、はあ……」

「そんなことは聞いておらん。何故今になって帰ってきたかと聞いておるのじゃ」

鎧姿で金色髪のリモールと呼ばれた男はにこやかに笑って言うがルミナスは曖昧な苦笑いに近い表情をし、トライデントは何処か警戒しているような苦々しい表情で言い放つ

「ははは……怖いなあ」

「別に故郷なんだから、いつ帰ってきたって良いだろう？ それよりルミナス君、僕と一緒に来ないかい？」

「え？」

「なんじゃと？」

いきなりのリモールの発言にルミナスとトライデントの二人は驚いていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2593t/>

魔王に掛けられた死の呪いは末代まで続く

2011年10月9日01時50分発行